

# 人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育 における支援(3)

山本理絵\*<sup>1</sup>・松川礼子\*<sup>2</sup>・近藤みえ子\*<sup>3</sup>

## 1. 研究目的

本研究では、人間関係に困難を抱える幼児に対する支援について、安心して自分が出せ、異質性や多様性を受け入れやすい特徴をもっている異年齢集団の保育を通してどのような関係性が発展し、どのような援助方法が有効か、保育実践の継続的観察及び保育者等からの聞き取り調査の分析により明らかにする。その際、活動内容、参加の形態・方法、保育者の働きかけ等によって、おとなとの関係、子どもたち同士の関係や、子どもの安心感、受容・承認、援助・自己調整、自尊感情<sup>1)</sup>がどのように変化するか検討する。

先に報告した論文(1)では、3歳から5歳の子どもの異年齢クラスにおいて、全般的に知的発達に多少の遅れがあり集団に入ることが難しかった子どもを中心にとりあげた<sup>2)</sup>。論文(2)では、1歳から5歳児の異年齢クラスにおいて、落ち着きがなく、相手の気持ちに気づくことや自分の要求を出すことが難しかった子どもを中心に、その変化を分析した<sup>3)</sup>。

このような子どもも異年齢のクラス集団では、甘え—甘えられる関係、憧れ—憧れられる関係、認め合う関係、教えてほしい—教えてあげる関係の中で、他者を受容・承認し、友達を援助しようとしたり、自己主張と周りの要求とを自己調整しようとしたりする姿がみられた。次第に年少の子をかわいがったり気にかけていたりするようにもなり、甘えられたり、憧れられ、慕われる側になっていき、指示を出したり、援助したりし、5歳児としての自覚や自己肯定感が育っていつている。

その事例を通して異年齢保育においては、年長児等のやっていることが見えやすく、見通しをもちやす

く、模倣しやすくし、年長児に支えられて安心感をもって意欲的に活動に取り組めるように援助すること、興味をもて達成感もてる活動や玩具を用意すること、やりたいことを保育者が丁寧に聴き取り集団での活動に発展させていくこと、小グループで生活したりすること、できたことを実感できるようにほめたり、見て真似したり自分もやってみたいと思えるようになる環境を設定すること、活動内容や方法をわかりやすく伝え、保育者がやって見せたり一緒に行ったりすることが重要だということが示唆された。

今回の論文では、1歳から5歳までの子どもが同じ部屋で生活している保育園で、衝動的・暴力的行動が多かった子どもの事例を取り上げて分析する。子どもたちどうしの関係については、前回の事例分析と同様、a.甘え—甘えられ・頼りにされる関係、b.憧れ—憧れられ、c.認めあう関係、d.教えてほしい—教えてあげる関係、e.要求しあい、鍛えあい、励ましあう関係などの視点から人間関係の発展をとらえたい<sup>4)</sup>。3歳児～5歳児の異年齢クラスと1歳児～5歳児の異年齢クラスとの違いについても検討したい。

## 2. 研究方法

B保育園の異年齢クラスにおいて月1回程度の観察及び保育者とのカンファレンスを2年以上継続的に行っており、その記録を分析する。異年齢クラスの子ども的人数は、1年目：19名（5歳児4名 4歳児4名 3歳児3名—10月入所児1名を含む 2歳児4名 1歳児4名）、2年目：19名（5歳児4名 4歳児4名 3歳児3名 2歳児4名 1歳児4名）である。

観察は、午前9時すぎ頃から11時半頃まで、通常の保育の流れの中で参与観察を山本・松川の2名で行った。カンファレンスは観察の後1時間程度、クラス担任と一緒に、注目している子どもについての1か月の状況・変化や気になっていること、観察でみられたことなどを報告し、その意味や今後の方針などについて話し合った。観察・カンファレンス終了後に筆者らで記録を作成し、内容を確認した。

年度途中で3歳児クラスに入園してきて、衝動的で暴力的な行動が多く、トラブルになることが多かったJ(男児・12月生まれ)の記録を、①活動意欲・目的意識(見通し、認識、期待など)、②友達との関係を中心にその変化を分析する。前述の観点からの子どもの変化には下線      を、保育者の働きかけには      を記した。

本研究の実施・発表にあたっては、対象の保育園及び保護者には承諾を得、愛知県立大学研究倫理審査委員会の許可を得ている。

### 3. 分析結果

#### 1期(3歳児10月～3月)

##### (1) 自分の思ったようにできないと癩癩をおこす

Jは、ジャンケンに負けたり、思い通りに体操や絵を描くことができなかつたりしたときに怒っていた。体操が上手と褒められて突然切れて暴れたこともあった。その体操は自分がいない時にやったものなのに、上手と褒められたことを不本意に思い怒ったのではないかと思われる。鬼の絵を描いた時は、角がうまく描けないと怒った。どんな角が描きたかったのか聞くと、自分の憧れている「Yくんのような角が描きたかった」と答えている。このことからイメージする力や友達と比べる力は育っていると考えられる。

一般的にも3,4歳児はできないことについてジレンマのある時期であることをふまえ、異年齢で一枚の絵を共同で描く方法を取った。このような、できないが気にならなくなるような活動内容の設定も必要ではないかということが、カンファレンスで話し合われた。1月にはJは、ジャンケンでは負けても怒らなくなった。

##### (2) 年上の友達の真似をして遊び自分が受け入れられていることを少しずつ感じる

###### ①年下の友達との関係

この頃、Jは衝動的に手が出ることが多く、1歳児

が怖がっていた。小さい子に関わりたいが関わり方がわからず、小さい子の顔を触って嫌がられ手が出たり、遊んでいる玩具を取ったり押ししたりしてしまう。つもり遊びはでき、遊びがあれば集中するのだが、自分がやりたい遊びが見つからないと手が出たり、玩具をひっくり返す姿が目につく。

自分の好きな遊びを介しては、友達と関われるが、食事場面では、隣に座りたいと思うとその相手の髪の毛を引っ張ることがあった。うまく言葉で言えず自分に注目して振り向いてほしかったり、嫌な事をして相手の反応を楽しむことがあるのではないかと考えられる。しかし、給食配りの当番活動は好きで、楽しんでやっている。

#### 〈エピソード1〉 12月7日 朝の室内で

朝、1歳児のRの遊んでいた玩具の汽車を取り上げる。「返して」と言われ、届かないように手を上に挙げると、Rも同じように手を上に挙げてJの真似をする。その姿を見てその後JはRを優しく抱っこしてあげる。その後時々Rを押すこともあった。

##### 〔考察〕

Jは最初、目についた汽車に衝動的に反応したのかもしれないが、自分の真似をしてくれると自分が受け入れられた気持ちになりうれしくなったのではないかと考えられる。このようなことを繰り返しながら、力の加減が少しずつわかってきている。

###### ②年上の友達との関係

4歳児Iの真似をして一緒に遊ぶことが多く、砂遊びをしたり、公園で木に登ったりしていた。

#### 〈エピソード2〉 10月15日 午前中の遊び

朝の集まりで、どんぐりを拾いに公園に行くことに決まった。公園に着くとIが砂場で遊んでいる友達を見つけ砂場へ向かうと、Jも一緒に砂場へ向かう。そのうちJがIの背中に砂をかける(Jがなぜかけたのはわからない)。Iは「Jくんが砂かけた!」と保育者に訴えるが怒った口調ではない。JがIの使っていたスコップを持って行った時も、Iは取り返そうとしないので、そのままになってしまった。

##### 〔考察〕

Jが衝動的な行動をしてもIはあまり怒らないので、自分を受け入れてくれたと感じているのではないかと考えられる。Jにとって興味ある遊びをするIの

存在は憧れの存在だと思われる。担任によれば、I自身もいろいろトラブルを起こしていたが、自分より年下のJが入所し、「そんなことしちゃだめだよ」と止めるようになった。しかしやさしい口調なので、Jも反発することが少なかったのではないだろうか。

### 〈エピソード3〉 12月7日 午前中の遊び

Jは園庭でIに「砂遊びを一緒にやろう」と言うのと、「イヤダ。悪いことするから」と言われる。しかし、その後Iから「自分のバケツの砂を使っていいよ」と言われる。Iが砂の入ったバケツに水を入れかき混ぜてコーヒーを作っていると2歳児のOが加わり、Jも参加してコーヒー屋さんを続けている。そこへ1歳児が三輪車で近づくと、Iがこっちに来ないでと声を掛けながら場所を変えて遊び続ける。同じクラスの4,5歳児は、バナナ鬼をしていたが、IもJも参加しようとはしなかった。

#### 〔考察〕

Iと一緒にJも外に出ると、バケツ・スコップなどの物が目に入るとそれを使ってつもり遊びができ、ある程度継続できるようになっている。2人の間のやりとりはないが、JはIの真似をしている。Iが周りを気にしながら、ぶつからないように配慮しているので、トラブルは起きなかった。

### 〈エピソード4〉 1月18日 午前中の遊び

Iが公園で見つけた棒が気に入り、それを持って通称秘密基地と呼ぶ木の茂みに入る。JもIと同じ秘密基地に入り二人で競うように木に登り、茂みから顔を出すことを繰り返していた。ちょっとした隙にIの登っていた木にJが登ってしまう。その木をめぐる、IとJの次のようなやりとりがあった。I「ちょっとJ! 降りてきて。楽しいことやるから。降りてこないと楽しいことはじまらないよ。」J「じゃあ、棒かして」。すかさず、Iは「俺の棒だから」と断っていたが、「J! (木から) 降りてきて。ここに棒置いとくから、いつでもオレにイイ? って言って!」(IはJが棒を取りに降りた隙に、木を取り戻そうという魂胆のようだ)。だが、Jが降りないのでIは諦め別の木に行ってしまう。その後、一人になったJは、つまらなくなったのか、かくれんぼをしている子どもと担任のところに走って仲間入りする。

秘密基地で遊んでいる間、JもIも他の子どもたちがやっている色鬼やかくれんぼはしないと書いてい

た。しかし、Jがかくれんぼに参加すると、Iもそれを見て参加する。Jは木の茂みに上手に隠れ最後まで見つからない。Jはじっと隠れていることが上手で、最後まで見つからなかったことを得意そうにしていた。

#### 〔考察〕

木登りに関しては、Jは自信があり自分の要求である。Iに木から降りてくるように要求され、Jは「じゃあ棒貸して」と言ったが、駆け引きの考えというより、目についたモノが欲しかったのだと思われる。しかし「かして」とことばで相手に伝えることができたのは、自分を受け入れてくれるIならという安心感があったと考えられる。

また、ルールややりとりのある集団遊びは苦手であるが、かくれんぼは、木の繁みに「隠れる」という得意技を活かして楽しめている。

### ③子ども同士の話し合いの場面

1月頃Jは、散歩に行くときに手をつなぐ相手にこだわりを見せていた。保育者が仲立ちをして気持ちの折り合いをつける交渉を根気よく繰り返した。

朝のあつまりで散歩先などの話し合いを3~5歳児で行っていたが、3月頃からは、ホワイトボードに出た意見を書き出すことで、視覚的にわかりやすくなり、皆が集中して話し合いができるようになった。しかし、Jは自分の意見を言う事や、理屈の通った提案はできるが、話し合いの結果は耳に入らず、自分の思うように動いてしまう。また、曜日によって落ち着きにムラがあり、わかっている友達に手が出してしまうことがある。

## 2期(4歳児4月~7月)

### 〈4,5月の様子〉

前年度からの持ち上がりクラスで、しっかり者が揃っていた年長児たちが抜け、担任も1名交替し新しく1歳児をも迎えて、4月当初、クラス全体が落ち着かない状態であった。

#### (1) 自分の思いがはっきりせず言葉で表現できず苛立つ

### 〈エピソード5〉 5月24日 午前中の遊び

公園で忍者鬼(保育者の天狗につかまらないように、いろいろな術を考えて逃げる遊び)を4,5歳児と楽しんだ帰り道、Jは突然道路わきの立看板に飛び乗ったり降りたりし始める。このため全員が、その都

度足止め状態になり保育園に帰りたくても帰れない状態が繰り返される。保育者が「お昼になっちゃうから早く帰りたいんだ」と伝えるがなかなか気持ちに折り合いがつけきれない。

〔考察〕

Jの行為の理由はよくわからなかったが、衝動的にコントロールできずに始めた動きだが、飛び降りるといふ感覚刺激が快になってしまい、保育者に共感してもらえないことから意固地になってしまったとも考えられる。次の〈米とぎ事件〉からもわかるように、Jは自分でも自分の思いをはっきり自覚できていなかったり、意に反した行動になってしまっているのではないだろうか。

#### 〈米とぎ事件（6月）〉

部屋に1台ずつ家庭用の炊飯器が置いてあり、米とぎは、やりたい子どもがやることになっている（食べる分の半分は給食室で炊いている）。JはIが米をといでいるところに近づき様子をのぞきこみやとやらせてもらったところだった。IとJが水をジャージャ出しつづけ、米があふれそうな状態になってもやめないので担任保育者は強引に水を止める。Iは悪かったと思いつつその場から離れたが、Jは、やとやらせてもらったところなのという気持ちがあったのか、ぐっと身を固くして黙々と水を入れ続けた。「こぼれたお米どうするんだった？」ときつい口調で迫られことで、Jは、米に対して水の量が多すぎたと思うが、直すと言えず「そのままよい」と言ってしまった。本当は多すぎたことを悔やみ、そのためその後、朝の集まりで落ち着いて座ることもできず、遊びも落ち着いて参加できなかった。昼食時間になっても部屋に入れず、（ぐちゃぐちゃのごはんになってしまうことが皆に悪いと思いつつもそれがうまく表現できず）、ご飯を食べたくないとっておかずしか食べなかった。（担任からの聞き取りより）

こうした場面から、保育者はJの行動の裏にある気持ちがわかりづらいためJの本当の思いに心を寄せられず、逃げ道をふさぐ形で迫っていたことに気づかされたと言う。わざとやっているわけではなく、それなりの理由があり、皆のことを考えているのである。その前後の心の動きを理解していないと更に行動を悪循環させてしまうことがあるといえる。

#### 〈エピソード6〉 7月5日 朝の集まりの前

9時15分頃、部屋で1歳児から5歳児が入り混じって自由遊びを展開している。新聞紙を丸めて作ったお団子をIがトングで挟んで、部屋の仕切りの上に並べているとJも近づいてきて保育者に自分も同じようなトングを作ってほしいと要求する。

トングを手に入れて戻ると、Iはフェルトで作ったドーナツを団子と一緒に並べ「いらっしゃいませ、何がほしいですか？」とお店屋さんごっこを観察者相手に始める。観察者が「いくらですか？」と言い、Iが「これはチョコレートとストロベリーです」とやりとりをする。すると突然Jの行動が乱暴になり、団子を投げたり、観察者に強引に食べさせようとして、つもりの世界から離れてしまう。この間、IとJの間ではお店屋さんとしての会話らしきものはみられなかった。

〔考察〕

Jは、自分の好きな年長児Iの遊びを真似してやろうとし、ほしい道具を保育者に作ってもらうよう要求できている。突然、乱暴になった原因はよくわからなかったが、観察者が「これはいくらですか？」といきなり遊びに介入したことが自分のつもりと違っていたのかもしれないし、また、言葉でうまくやりとりできないことが苛立ちの原因かと考えられる。この日はいつもの担任が遅番でその場におらず、臨時の保育者が担当していた。そのような状況の中で、自分の気持ちを伝えるにできなかったのかもしれない。

#### 〈エピソード7〉 7月5日 朝のあつまり

この日も朝のあつまり時の保育者が担任と違ったためいつもの流れと違うのか、朝の集まりはクラス全体がざわざわとして集中できない様子だった。そこで担当保育者が「○ちゃん（保育者の名前）ゲーム」をして皆の気持ちを集中させようとした。

「○ちゃんゲーム♪○ちゃんゲーム♪好きな人はだーれ？」と保育者がゲーム感覚で質問し、それに子どもたちが順に答えていくゲームだが、Jはもじもじして答えられない。次の「○ちゃんゲーム♪○ちゃんゲーム♪こんなことができますか？」と忍者の片足立ちポーズをはじめた途端、Jがいきなり近くの押し入れの戸を足で蹴り荒れる。担当保育者が止めると更に激しく暴れる。ちょうどそこへいつもの担任が出勤し、Jを外へ連れ出し、静かな場所で気持ちを落ち着かせる。

## 〔考察〕

本事例では、Jの周りの落ち着かない雰囲気と、思うようにできないことへの苛立ちがあると思われる。“好きな人はだれか”という質問も具体的でなく答えにくかったのではないだろうか。担任によると、6、7月は、Jの気持ちのコントロールについて、どこで突然荒れるのか引掛かりどころは日々変わるため、対応が難しく悩んでいた。このような場合、まずは、ざわざわした場所から、静かな場所へ移動させ落ち着かせるようにしている。そして、保育者はJのよいところ、夢中になれるものを探ろうとしていた。

## 〈エピソード8〉 7月31日 午前中の遊び

外へ出るといきなりIと一緒にホースで水飛ばしをして、にやにやしている。何をするという目的の感じられない水飛ばしを続け、プレイハウスの屋根にも水を飛ばす。Iから、「上から流せ——」と水の流し方や方向を指示されるがJには伝わらない。しかしIの言ったことは気にして動こうとはしている。

そのうち小さい子の使っていた三輪車に水をかけ始める。その時、担任保育者から「J君洗車してくれているの！きれいにしてこの車の泥を全部落とすね」と声を掛けられる。その時から、泥がついているところをめざして水をかけるように遊び方が変化した。

## 〔考察〕

Jの行動は、自分がどんなことをしたいのか夢中になれる遊びを見つけるのに時間がかかるように見える。ホースで水を飛ばして誰かの車を狙っているが、本当にそれが楽しいと思っているのかというと、そうでもないようにも見える。担任から「J君洗車してくれているの！きれいにしてこの車の泥を全部落とすね」と肯定的な受け止めの言葉と、更に具体的な指示が出されたことで、初めて洗車の目的がはっきりしたように見えた。その時から「ここにもまだ泥がついているぞ」と水かけ行動に目的と意味が加わり、達成感をもてたように感じられた。Jにはこうした具体的な言葉掛けが必要なかもしれない。

## 〈6、7月の様子〉

Jの嫌な気持ちに丁寧に寄り添い気持ちを聞いてあげることが必要だが、Jは気持ちを語るができない。そのためひとつ引っかけができる気持ちをもそのまま引きずって、そのイライラが人に向かってしまう。

気持ちを切り替える手段として、人ではなく、物との関わりで落ち着けないかと考えるが、制作に苦手意識がある（完璧主義の気持ちと現実には指先の不器用さとのギャップあり）。担任保育者は、できなくとも大丈夫であること、できなくとも、やろうとする気持ちが大事であることを異年齢の暮らしの中で感じられるように実践しようと考えた。

## (2) 5歳児の真似をしてごっこ遊びや年下の食事の世話をする

## ① 食事場面で年下の世話をする

5月に入っても集団の落ち着かなさやIやJにとって、生活のしづらさを感じ、食事場面で待ち時間、配膳、おかわりの場面の見直しを行った。

これまで全員が座ってから、当番が配っていたが、待ち時間中のトラブルや、まだ遊び足りない子もおり、全員揃うのが難しく待てない姿があった。そこで、グループ単位でそろったら「いただきます」をすることに変更した。まだ遊びたいと、なかなか席に座ろうとしないJには、「先に食べているね」と声を掛け食べ始めることにした。座って食べる子が増えると、全体の様子が見えやすくなる事で、Jも、ようやく座る気持ちに切り替わっていった。

配膳も当番が全体に配る方法から、グループ単位に変更した。汁物以外のご飯と皿は子どもたちが配り、テーブルの真ん中におかずの入った大皿を置いて、各自が自分の食べたい量を取る方法に変更し見通しをもって他児の分を残しておくことができるようにした。大きい子は、小さな子に「おかわりは、自分にとっていいんだよ」と教えたり、保育者のように盛ってあげる姿が見られるようになった。

また、グループ単位の仕事に切り替えたことで、お互いにグループのメンバーの名前や動きに気づくことが増えた。Jも友達の役に立つことを喜んでしている。グループの小さい子のカレーをついであげたり、お茶を取って来てあげる姿が見られた。

## ② 5歳児の真似をして保育者と数人でごっこの遊びを楽しむ

5歳児の真似をして遊ぶことが多くなる。7月5日のエピソード6では、5歳児Iが、だんご屋さんをしているのを見て自分もやり始めるが、やりとりもなく、そのうちだんごを投げたりする乱暴な行動になってしまった。しかし、やりとりの言葉がなくても成立

するごっこ的な遊びでは次の例のように楽しむ姿が見られた。

〈エピソード9〉 5月24日 午前中の遊び

保育者と一緒に4, 5歳児を中心にグラウンドと周りの樹木の茂みを利用した「忍者鬼」が始まる。Jは数人の憧れている5歳児の仲間に交じり参加する。保育者が天狗となり、忍者を探しに行くが、忍者はいろいろな術を考え天狗につかまらないように逃げるという遊びである。石の術、葉っぱの術で変身を面白がり、そのたびに保育者が大げさに悔しがることで、Jも5歳児のYらの動きを意識しながら変身遊びを続けていた。

〔考察〕

ひょうたん鬼や、バナナ鬼のようなルールのはっきりした遊びより、こうしたごっこの要素が強い遊びだと、「次はどんな術にするか？」と仲間を意識し、天狗の一員として行動を共に持続して遊びに参加することができる。

③勘違いして友達とトラブルが生じるが代弁してもらえる

〈エピソード10〉 7月31日 朝のあつまり

この日Jは登園が遅く、登園するとすぐ朝の集まりが始まる。水遊びをしようと保育者が提案すると皆がさっそく着替えを始める。その時Jが同年齢のHを叩き、手に紙飛行機をもっている。Jは憧れの5歳児のTから自分にもらえたと思ったらしく、「これJのだよ」と言っている。担任の「Jがもらったと思ったんだよね」という言葉で気持ちが治まった。Hには3歳の女兒が、「飛行機取られて嫌な気持ちだった？」と気持ちを受け止め代弁しようとする言葉をかけていた。

〔考察〕

自分の気持ちを受け止めて更に気持ちを代弁してくれる保育者の存在がJの安心感となる。トラブルが起こった時、日常的に子どもの気持ちを聞き、受け止めようとする保育者の声掛けの姿や大きい子たちの他児に対する振る舞いを小さい子たちは見て学び合っている。5歳児のTやIも、Jに対する関わり方がわかってきて、適度に距離を置いたり、「背中をけた時はごめんて言ってね」など、トラブルのさいに、「そんなことしちゃダメだよ」と止めることもあった。そのような時には「〇〇したかった」と言えるようになって

てきた。

3期 (4歳児8月～3月)

(1) 見通しが少し持て切り替えができるようになる

①うまくできないことで苛立つ姿が減る

担任によれば、この頃のJは、体調の変化によって衝動的な行動は繰り返されているが、8月頃から集団遊びができるようになりヘビジャンケンのジャンケンで負けても怒らなくなった。勝ちが良かったと、こだわるときもあるがそうでない日もあり、少し完璧主義から融通性のある姿に変化してきている。

七夕制作のとき、Jは線の上をきちんと上手に切りたい、上手に作りたいという願望があるが、うまくできない子もいることや、憧れているAやBでさえうまくできない姿を見て、怒らないで取り組んだ。そのような経験の積み重ねによって変化したと考えられる。

9月初め、「プールをつくろう!」と共同画に取り組んだ。前日に墨汁で自分の顔を描く際、みんなが見ている前で1人ずつ描く方法をとった。他児の描き方を見ることで見通しや安心感をもったのか、Jも集中して自分の番を待つことができた。今回も模造紙を3枚繋げ、更にもう一枚繋げてクレヨンで色塗り。「宝を描こう!」の課題に向かって、どの子も色や大きさなど考え、ずっと描き続けた。このように一つの事に向かって誰も途中で抜けてしまうことなく楽しみながら描き続ける姿に、Jも含めクラス集団の変化が感じられる。

②見通しが持てると切り替えられるようになる

Jは嫌だった気持ちを保育者に受け止めてもらい、見通しが少し持て、切り替えができるようになってきた。たとえば、バナナ鬼でタッチされ怒っていても、保育者が「ぎりぎりタッチされて嫌だったの?」「でもタッチしてもらおうと、また鬼になれるよ」と話すと、その言葉を聞いた後、「あっそうか! まっいいか」と言って立ち直るようになった。最初はルールがわかりづらくやらなかったが、ルールを単純にし、更に帽子の色で分けしたことで、「開戦どん」や「どろけい」もチームがわかりやすくなり参加するようになる。

〈エピソード11〉 9月11日 朝のあつまり

朝の集まりで、体調が悪く泣く子が多くなるとなく

落ち着かない雰囲気では絵本を読み始めた矢先、遅く登園したJが突然、近くにいた女の子の上に覆いかぶさり泣かせる。あちこちに泣き声が起こり、騒然とした雰囲気が一層高まる。Jは一旦絵本のほうに近づくと、気持ちが治まらず入り口の扉に身体や足をぶつける。近くにいた担任Aが止めようと抱きかかえるが治まらない。絵本を読んでいた担任Bが中断してJに近づき抱っこして部屋の外へ一緒に退室する。しばらくしてJは落ち着いて戻ってきたが、担任Aの持つ絵本を叩き落とす。

その後、担任Bの「今日は、いつもと違う道を通って違う公園へ行くよ」の誘いかげに、Jは喜んで外へ出る。全員が揃うまで、Iと水たまりで遊び始める。室内とは打って変わってとても機嫌のいい表情をしていた。公園に着くと、さっそくJはブランコに座る。ブランコに乗ったJは保育者たちに何度も背中を押してもらい、すっかりご機嫌な様子だった。その後Iの姿を見つけると寄って行って、草で魚釣りごっこを始める。

〔考察〕

片付けから、絵本への切り替わりの時に何かあったのか、十分好きな遊びができないうちに集まりになってしまったからか、音に過敏で周りの騒々しさが嫌だったのか、周りの子どもたちにあたりちらしている。そして、それを止められたことが面白くなかったのか、入口の戸にあたる。保育者と一対一になり一旦は落ち着いたものの、部屋に戻ってきてからも、自分がいない間に絵本を読み進んでしまったのが気に入らないようだ。しかし、次の活動を興味を持てるように示されることで、切り替えがうまくできたと思われる。

公園では、自分にしっかり関わってもらっているという満足感か、うれしそうなお表情に変わった。気持ちが落ち着くと、Iと同じことをしたいようだった。

〈エピソード12〉 10月25日 午前中

この日Jは頭の後ろに絆創膏を貼っている（2,3日前に園庭で三輪車で転倒し、けがしたとのこと）。担任Bから、「今日、病院へ行くよ」と声を掛けられると、うれしそうに「Bとふたりで!」と確認する。他の保育者が「Jくんいなくなるとさみしいな」とつぶやくと「さみしい?」と聞き返す表情がうれしそうだ。この後、なかなか片付けられなかったおもちゃを「絵本読むからおもちゃ片付けて」と促されるとスッ

と気持ちを切り替え片付ける。

公園に着きシャベルを見つけると鉄棒の下の土を掘り始める。だんだんエスカレートし周りの子たちに土を掛け始めた。「だめ、止めて!」と近くの子に注意されると更にエスカレートする。しかし、担任Bに呼ばれ、「一緒に遊びたかったの? そういう時は一緒に遊ぼうって言うてみたら?」と声を掛けられたことで、「うん」とうなずき落ち着いた。

〔考察〕

いつもなら意に反して片付けを促されると、八つ当たりするか怒ることが多いJだが、今回は、“病院”“保育者と2人で”という特別感が功を奏しているのか、すんなり切り替えることができた。また、止めると言われるほどエスカレートする土掛け行為も、保育者が気持ちを汲んでくれたことで、落ち着いて保育者の言葉に従うことができた。

〈エピソード13〉 11月21日 午前中の散歩

この日は少し遠い公園へ行くことになる。Jも体調がすぐれないため、2,3歳児と一緒に散歩車に乗って行く。車の中で会話が弾むが、嫌なことを言われて泣く子がいると、前に何回か行ったことがあるJが、「早く行かないと間に合わないよ」と声を掛けていた。見通しが持てているようだ。

(2) 集団に受け止められていることを感じ集団遊びにも入ってくるようになる

①集団に受け止められていることを感じ相手の気持ちにも思いを寄せる

Jは集団に受け止められることによって、相手の気持ちを少しずつ理解できるようになっていった。8月頃から、友達が泣いている時に、自分の経験を踏まえ、「お母さんがバイバイしてさみしかったんだって!」と相手の気持ちに思いを寄せる言葉が聞かれるようになった。理由なしに友達にあたることが減ってきた。同時に、言葉で自分の気持ちを伝えられるようにもなってきた。例えば、8月にブロックで道路をつくった時、「さわらないでね」と、周りの子に声を掛けていた。

また、小さい子のおかわりをもってきてあげるようになったら、1歳児から「好き」と言われ気持ちが安定してきた（8月）。集団に受け止められることによって、相手の気持ちを少しずつ理解できるようになっていったと考えられる。

②友達を求める気持ちが強まり、集団の遊びにも入ってくるようになる

Jがトラブルを起こし、落ち着かせるために保育者と部屋の外へ出た時、以前は保育者との関わりを楽しんでいたが、8月頃からは、早く戻りたいという気持ちが強くなってきた。

前述したように、Jはへびジャンケンやバナナ鬼などの集団遊びに参加できるようになってきた。バナナ鬼でタッチされて怒っていても、嫌だった気持ちを保育者に受け止めてもらったうえで、更にタッチしてもらおうとまた逃げるができることがわかって、切り替えられるようになった。保育者も一緒に入ること、Jが鬼になりバナナ鬼を始める姿が見られるようになった。

また、11月頃から、Jも含めて4、5歳児が固まって遊ぶようになり、異年齢のクラス全体が朝からゆったり穏やかで落ち着いた雰囲気でも過ごせるようになった。12月には、Jは自分が友達にどのくらい好かれているか気にし始めている。エピソードとして、Jは「○○君好きな人〜？」と聞いていた。(本当は“J好きな人〜？”と、聞きたいのに怖くて聞けない様子だった。)6人手を上げるのを見て「スゲーな」とつぶやいていた。

〈エピソード14〉 11月21日 朝の集まり

朝の集まりの時、2、3歳児がずらりと棚に並んで腰かけ「けっけっけ♪」と手遊びを楽しそうにしている。楽しい雰囲気のままに、子どもが子どもの名前を呼んで出席調べを行う。2歳児は堂々と、4歳児は「照れる、照れる」と言いながら名前を呼びあっている。Jも照れていたが、憧れてよく一緒に遊んでいるIともう一人女兒Uの名前を呼ぶ。

〈エピソード15〉 12月13日 誕生会の朝

室内にはサンタやトナカイの折り紙が飾られ12月の楽しい雰囲気が漂っている。5歳児たちが、カセットテープから流れる「みそ みそみそ〜てまえみそ♪」との味噌ダンスの曲に合わせて楽しそうに踊っている。そのうち、微熱があったJも検温を済ますと一緒に踊りの仲間に入り何度も笑い合っていて楽しんでいた。

その日は誕生会があるので、朝から「きょうオレの誕生日！ 5さい！」と教えに来てくれる。

朝の集まりになり、担任Bが鉄琴で「あわてんぼうのサンタクロース」のメロディを弾き始めると、皆の

気持ちがスーと保育者の奏でる音色に集中する。「みんなで歌ってみようか」の声で歌いだす。静かに集中してクラス全体に心地よい穏やかな空気が生まれる。

[考察]

クラスが固まりとなってきたように感じられる。いつも寝そべっている姿が印象のIも、自閉症の診断を受けたCもJも、この3人が楽しそうにクラス仲間の中心に位置して踊る姿は、初めて見る光景であった。

Jは、自分の誕生会を4月からとても楽しみにしており、毎月なぜ自分の誕生会でないのかと怒っていたという。このように認識面に弱さがうかがえるが、待ち続けた誕生会がついにやってきた喜びはひとしおである。先月あたりから、クラス全体にJがイライラしたり、いつ爆発するかという緊迫感が少なくなった。たまに来る観察者が声を掛けても、自然体で応えてくれるようになった。わかることも増え、受け止められる心地よい体験が積み重なり、そこから対人関係が広がっていったのではないだろうか。

③他の友達の意見を聴いて、自分の意見を変える

11月頃からJは5歳の誕生日を前にして、1番へのこだわりが出てきた。そのせいかできないと思うと友達をポーンと押してしまう。周りがより見えてきたからこそのこだわりであると考えられるが、まだ相手の気持ちの理解に弱さがある。泣いている子がいると自分の体験に合わせ、感情を推測し共感することができるようになったとはいえ、自分が良いと思うことは相手もそう思うはずだと思込込ており、そうではない事が納得できない姿が見られた。

そうした気持ちをコントロールする時、大人のフォローでは収まらなくなり、子どもたちの存在が大きくなってきた。Jはみんなの中で自分がどのように見られているか、自分のことを好きと思う子がいるかを気にするようにもなっている。このため、集団での話し合いの場なども重要になってきた。

〈エピソード16〉 12月13日 朝のあつまり

担任Bと4、5歳児8人で散歩の行き先を相談する。担任「保育園の園庭は、他のクラスが使うからだめになったね。みんなどこに行きたい？」

I「○公園で走り回って木登りしたい」(真っ先に発言)

担任「まだ何も言っていない人？」(発言していないJに向けて)



担任「Jくんは？」

J「……」（以前、4、5歳のみで行った遠い公園に行きたいと思っている）

担任「Iくんは○公園へ行きたいって言っているけど？」（発言するのをじーっと待つ）

Jは寝そべったまま「△公園」と小さな声でつぶやく。

担任「△公園に行きたいんだって。（皆にJの思いを伝えながらJに向かって）「でも今日はもう10時になっちゃったからね。遠いからすぐ帰らないといけない。昨日のように9時半に出発できたら行けるよ。」

I（そのやりとりをじーっと聴いている）

J「（でも）○公園は毎日毎日行っているから行きたくない。まいにち！まいにち！」

担任「毎日毎日行っているから行きたくないんだって」（Jの思いを皆に伝える）

担任「Jは○公園じゃなかったらどこへ行きたい？Jくん以外みんな○公園だよ」

J「○公園は×にしよ」

すると突然IがJに「おれの話、ちゃんと聞け〜」（大きな声で迫る）

担任（Jを膝に抱っこしてJの話を聞こうとする）そして皆に「Jくんいろいろ考えているんだよ。みんな○公園がいいっていうけど、ぼくは△公園に行きたいけどなあーてね」（Jの気持ちを通訳する。）

担任「みんなはどうやって決めたらいいと思う？」（もう一度相談するように問いかける）

A「おれはどこでもいい」（初め○公園と発言していた）

するとJが「みんな、おれの話きけ〜」（もう一度言い直して）「みんな、おれの話聞いて！」（と、やさしい口調に変わる）

J「じゃー○公園がいい人？」（5人手を挙げる）

J「なんでもいい人？」（と自分も手を挙げる。気持ちの折り合いがついたようだ）。すかさず、

担任「Jくんも○公園で良いって！」

すると、5歳児のIもAもBもJにかけより握手をし、「J君ありがとう！」

この日の午後、4歳児Yが自分の思いを主張して譲ろうとしない場面でJが怒った時、保「さっき遊びの相談の時、みんなJくんが考える時間、待ってくれたよね」と言われると「あっそうだった」と怒りを鎮めることがあった。

〔考察〕

誕生日を迎えた今回は、Jの変化を大きく感じた一日であった。Jは自分の思いを言葉にし、穏やかな口調になっている。Jの受け止められる体験の中で、他児の存在を自分の中に取り込んでいく姿とその中で自分の存在を気にする心の変化を感じる。この背景には、保育者がJの言動の奥にある気持ちの受け止めと、うまく表現しきれない気持ちの代弁や、他児への通訳の役割を丁寧に行っていることにあると考えられる。皆からは、Jが自分の思いを修正して自分たちの思いに合わせてくれたことに思わずありがとうの言葉が飛び出したようだ。

11月のある日、怒ったりトラブルを起こさないととても気持ちよく過ごせた日に、Jは「今日はすごくいい一日だった！」とつぶやいていたそうだ。本当はトラブルを起こさないと、みんなと楽しく過ごしたいという願いを持っていることがわかるつぶやきである。それを言葉で表現できるようになったことに成長が感じられる。

#### ④自分が大きいことを自覚する

10月頃から午睡がなくなった5歳児のみが、山登りに行っていたが、これまで5歳児が出かけたときにJはイライラしていた。12月に4歳児も一緒に出かけた日には、Jは大きくなった実感をもったように見えたそうだ。それまでの苛立ちは「うらやましい」「自分も行きたい」という気持ちの表現であったと考えられる。

#### 〈エピソード17〉 1月24日 午前中の遊び

2歳児のOとKが仲良く遊んでいるままごとコーナーで、JはいきなりOを突き飛ばし泣かせ、そのあと牛乳パックで作った積み木で作ったバイクにまたがるKの積み木を取り上げ、バイクをいきなり壊す。Jは一瞬「しまった」という表情を見せるがその直後バイクにまたがったOの背中を後ろから押し倒し泣かせる。

〔考察〕

12月に落ち着きを見せたJが1月の観察では、あちこちでトラブルを起こしている。担任からの聞き取りでは、その後母親が忙しくなり、本人も体調を崩したことで4月頃のような状態に戻ってしまったとのことである。しかし、Jにとっての2歳児Oの存在は、乱暴なことをしてもOは自分のことを嫌わない、食事

の時には自分の隣に座りたいといってくれる安心感のある存在のようだ。OにとってもJは、抱っこしてくれる好きな子であるらしい。Jの中には皆から好かれる、小さい子のお世話をしあげたい、役に立つ自分でありたいと思っているようだ。これらから、自分が大きいことも自覚していると考えられる。

1月には、朝の会の欠席調べで、「♪クイズクイズなーんのクイズ?」「今日のお休み」「○○くん(合っているときは手をパンパンと二つ叩く)」「菓を飲む人?」というように、1歳児から全員が参加し楽しんでた。このような小さい子と一緒に楽しむ活動の中で、1,2歳児のかわいらしさも感じていたのではないかと考えられる。

#### 〈エピソード18〉 2月21日 午前中公園での遊び

その日はいつもの担任が休みでJは気持ちが不安定なので、職員室でC保育者と1対1で過ごしていた。朝の集まりが終わり、散歩に行く時間に担任Bと合流する。出発前、JがIと手をつないでいたが、そこに5歳児MがJにつなぎたいと言い、JとIに交渉する。Jが「いいよ」と言って手をつなげたYから「ありがとう」と言われる場面があった。

公園に到着すると、2,3,4歳児の女児が固まって、担任Aと一緒に「ムシャムシャの森」のストーリーで鬼ごっこをしていた。Jたち4,5歳児の男児グループは、年下の子どもたちに見つからないように気の茂みの中を秘密基地にして秘密の探検ごっこをしていた。帰りも「小さい子たちに見つからないように」と声や姿を潜めまるで忍者のように、秘密の道を通り抜け保育園まで帰るつもりようだ。「俺リーダー!」とJが張り切って先頭を陣とっていた。

#### 〔考察〕

年明け以降Jの気持ちが不安定になっており、安心できることが大事だと保育者は考えた。Jには、友達の中の自分の存在感と居場所を求める気持ちも芽生えているので、それを満たす活動と、大人との関係で満足できる時間の両方が必要と考えて実践している。好きなことでたっぷり時間を過ごすその後、落ち着いた一日過ごせるようだ。

#### 4期(5歳児4月~9月)

##### (1) 好きな遊びやクラスを意識した活動を友達と楽しむようになる

新年度となり、未歩行の1歳児がいるため、安全を

考え静かな活動ができるように部屋の模様替えをした。入り口に近いロッカーなどのある部屋をままごとのキッチンで仕切り、ままごと・台所コーナーと絵本コーナーが作られ、食事の部屋では、3,4,5歳児中心のパズル・制作コーナーが作られていた。

4,5月は、5歳児は上の年齢の子どもたちが卒園して、どちらかというところとしていた。いちごシロップづくりやシャボン玉、タケノコさがし、虫探しなどを楽しみ、やりたいことをみんなでやってみようようにした。

#### 〈エピソード19〉 4月1日 いちごシロップづくり

担任BとJと他の2人と一緒に給食室におやつを取りに行った際に、Jが台所に置いてあるいちごシロップの瓶を見つけ、職員に「これなに?」と聞く。瓶のふたを開けて見せてくれ匂いもかがせてもらい、このシロップからいちごジュースができることを教えてもらった。Jは「飲みたい」と担任に言う。給食室職員に聞くように促すと「飲める?」と聞くことができる。「ちょっとならいいよ。」と言われ、J「えー、ちょっとは嫌だ。」と言う。

担任「じゃあ、お部屋のみんなでいっぱい飲む分ありますか?って聞いてみれば。」

J「いっぱい?」

職員「ないよ。」

Jたちがしゅんとしていたので

担任「いっぱい飲むにはどうしたらいいの?って聞いてみれば。」

J「いっぱい飲むにはどうしたらいい?」

職員「□(Jたちのクラス)の部屋で作ったら飲めるんじゃない?」

担任「□(の部屋)で作ればいって!作る?」

J「つくる!!」

担任「じゃあ、お部屋のみんなにも聞いてみないかね。」

Jは、一目散に部屋に走っていき、「みんなあ!いちごのジュースができるよ!作ろうよ!」

その話を聴いていた子どもたち10人位が、一緒に台所へ行って匂いをかがせてもらい、「作りたーい」と言う。

担任「作り方聞いたら?」

J「どうやって作るの?氷入れるの?」

職員「氷じゃなくてお砂糖なんだよ。お砂糖入れて、いちご入れて、またお砂糖入れて、いちご入れて、

最後にお砂糖でふたをしたらおしまい。簡単でしょ？」

J「そんなのかんたんじゃん。いまから作る！」

職員「うーん、今はいちごがないなあ。ごめんね。八百屋さんにも注文できるし、買いに行っ来てもらいよ。」

Jは（ここでつもりが崩れ）、「今作りたい」と、しばらく繰り返していたが、今は給食室に余分ないちごがないこと、今作ると今日のおやつに食べるいちごがなくなることを担任Bが繰り返し話していくと、今食べるいちごがなくなるのは嫌だということにようやく落ち着いた。Jは「だったら買いに行く」ということで、翌日買い物に行き、翌々日にシロップを仕込み、6日間ほどでいちごシロップは完成した。

シロップを仕込む日は、Jは、朝からうまくいかないことが多くて「もう作らない」と宣言して別の遊びをしていたが、終わりがけに気持ちを立て直して参加した。完成した日のおやつの際に「シロップおいしくできたね」と話をしていると、Jは「Jが作りたいて言ったから作れたんだよね」と嬉しそうに話した。

[考察]

Jがやりたいこと、つぶやいたことをのがさず言葉で表現させることによって、要求を実現している。自分が言ったことで、みんなも楽しみ、喜んでいたことを感じ取って、それを言葉にしたことに、満足感と自信がうかがえる。

保育者は、Jが「やりたい」と言った遊びをなるべく実現するように、その遊びに周りの子どもたちも巻き込んでいくこと、個別対応をしながらJをよい状態で集団に返すことを大事にするようにした。このような関わりを繰り返すなかで、J自身も楽しいと思える遊びが増え、保育者が他の友達を誘っても一緒に来て遊べるようになり、遊びの提案をしてくれるようになっていった。

シャボン玉遊びでは、Jをみんなが真似したりし、Jも自分が年長さんという自覚が出てきた。はさみを使った制作では、自分のことを「下手だよ」と言いながら○を切ったりするようになり、しりごみしたり怒ったりしなかった。また、小さい子も含め、つもりのある遊びも楽しめるようになる。

しかし、Jは怒るとトイレにこもることもあり、こうした姿から、逃げ場・落ち着かせる場が必要と考え、例えば別室や絵本のコーナーで保育者と過ごす時

間をつくり個別対応も行った。Jは自分が安心できる保育者がいないと不安になるので、担任が個別対応を行い、担任と本を見ていてうれしくなることもある。転園してくる前の園で、一人外に出された経験が、絵本を読んでいるときにフラッシュバックすることがあるので、安心できる方法で落ち着かせることが大事だと考えた。

7月も、やることがはっきりしているときはトラブルが少ないし積極的になれるので、夢中になれる好きなこと、例えばクッキー作り、プールでの潜り、絵本、クッキングなどを設定した。しかし、それが終わった後のつなぎ目に気持ちがモヤモヤしたり、ドンドンと友達を突き飛ばしたりする。そのような時は、保育者に「本当は、○○したかったんだね」と気持ちが受け止められると、「本当は○○したかった」と気持ちを言葉で表現できるときもある。

## (2) 周りの子どもたちの中で行動をコントロールしようとする

### ① 1, 2歳児との関係——抵抗されて行動を抑制する

Jは、進級してきた1歳児に近づきすぎたり、耳の近くで大声を出したり、突き飛ばしたりすることもあった。しかし、その1歳児もやりたいことを邪魔されたり嫌なことがあると、大声を出したり泣いたり、Jの顔をひっかこうとしたりするので、Jも相手が嫌がっていることがわかり、やめるようになった。また、(3期から)小さい子の世話をしたいと食事のおかわりを保育者のかわりについでくれたり、困っていると手助けするようになる。役割があつて、ほめられる機会があるとよいかもしれない。

### ② 3, 4, 5歳児との関係

Jの行動にはまだムラがあり、衝動的行動もある。しかし、Jの遊びに魅力を感じつつも怖がっていた5歳児のHに「イヤだ」とはっきり言われるようになったことで、暴力的行動を抑えることができるようになった。トランポリンを5歳児数人でやっていて、Jが3, 4歳児を入れてくれないことがあるが、人数が少ないと3歳のRも入れてくれる。Rが自分のことを慕っていることを感じてのことのようだが、大人数になると、ゆったりとできず振動が増えることを不快に感じていたのかもしれない。

Jは『チャレンジ ミッケ!』シリーズの本が好きで、同じ5歳のTも付き合ってくれる。デュプロをT

と一緒にすることもあり、Tがいないと落ち着かない様子も見られるようになった。HやTのように心を許せる友達ができてきた。また、午睡の時、隣の子が誰かで、もめることがあったが、しょうがないかと諦めることも少しできるようになってきた。

また、5月には他の部屋の5歳児(15人)と遊ぶ時間があり、バナナ鬼などをしていたが、Jはそこには入らなかった。知らない子に対する不安と警戒心があるようである。徐々に他のクラスの友達にも慣れていくように援助していく必要がある。

#### 〈エピソード20〉 6月12日 朝のあつまりから散歩へ

9時30分、皆が集まり、絵本を読み始めた頃、Jは母親と登園する。Jは、絵本を手にして母親とハグして別れる。あつまりが始まってしまっているのに、そこへすーっと入れない様子だった。手にした絵本を投げて、皆の読んでもらっている絵本のほうは見ようとししないで、母親を追うようにベランダへ出て行ってしまう。C保育者が、部屋の外に出て場を共有するように付き合う。Jが落ち着いてから部屋に入り、他児が散歩の用意をしている間、個別に本を読んでもらって気持ちが落ち着いたようだ。

その後、Jは散歩に行く途中で、道の真ん中を歩く2歳児を、危ないと注意しようと思ったのか、叩いてしまい泣かせてしまう。

#### 〔考察〕

母親の仕事の関係で早朝に登園し、皆が揃うまで十分遊ぶ時間があった時期は、満足するまでしっかり遊べたので調子が良かった。しかし、この時期は登園が遅くなり遊びの充実感が持ちづらくなっていると思われる。

Jは、登園したら5歳児Tとこの本を読もうと期待して来たのに、すでに絵本の時間が始まっており、自分の「登園したら〇〇しよう」というつもりが思うようにならなかったことで持ってきた本を投げつけてしまった。しかし、以前のようにドアを蹴る行動は見られず、そのかわりに、(自分の気持ちを抑えるためか)「出て行く」と言って自分で気持ちを切り替えることができた。

#### 〈エピソード21〉 7月10日 朝のあつまり前

5歳児1人、4歳児2人、2歳児1人が、プラレールを部屋いっぱい繋いで遊んでいる。そこへJが参加する。5歳児のHに自分の電車とHの持っている電車

と「交換しよう」と手を差し出したところ、無言で拒否される。そこでJは、Hの気を引こうと足の裏をくすぐるがHは依然無言で拒否の意思表示をする。Jは、自分が拒否されていることを感じると線路を壊し別の部屋へ移動し、そこで他児と遊ぶとするが避けられ、一人ぼっちにされてしまう。

#### 〔考察〕

担任によれば、Jは、本当はHと遊びたい。しかしHも、同じように自分の気持ちを言葉にすることが苦手で、思いはあってもうまく表現できる言葉が見つからず歯を食いしばるように泣くことが多い。反面、気持ちが許せ、安心できる相手や自分の自信のあること(電車)には強く自己主張できるので、Jとぶつかることが多い。今回の事例のような、Jが線路を壊してしまう行動の裏にある気持、「本当は〇〇したかったんだね」と保育者に受け止められることが有効である。こうしたことのくり返しで、自分が「本当は〇〇したかった」と気持ちを落ち着かせ、言葉で表現することも見られるようになった。

同じ時期、くわがたにゼリーをあげたいという3歳児Rと、自分がやりたいJとが飼育箱を引っぱりあうということがあった。いつもなら叩くと相手が諦めていたのに、なかなか諦めないRにJも困って叩くの躊躇した。それから何度もRとぶつかっていくうちに、他の友達にも手を出すことが少しずつ減っていった。

### 5期(5歳児10月～3月)

#### (1) 他クラスと関わる活動

##### ①クッキングを通して

クッキングは、前年度の反省をふまえ、一斉活動でなく、自分で遊びに区切りをつけ、やりたいところで参加する方法で行ってきた。11月にクラスでりんごジャムを作る時は、ピーラーでりんごの皮むきすることにした。担任はピーラーでむけるだろうかと心配していたが、りんごを洗っているのに気付いたJが、一番に皮むきをやりたいと要求した。「一人半分ずつね」の指示に、すごく集中してむき終わると外へ飛び出して行った。あとから来た2歳児もものすごく真剣に取り組めた。

お迎えの時間帯は人の出入りが多く、JやRは落ち着かなくなりトラブルも起こりやすい。2人にとっても少人数で大人とゆったりと関われる時間にしたい、

部屋に残っている子たちにとっても安心して遊べる時間が持てればという思いもあって、夕方の時間を選んで担任とJ、Rがたくさんできたものを他クラスにおすそわけに行っていた。

この日も、Rから「ほかのおうちの子も食べたいんじゃない?」と提案があったので、担任とJとRで、他の部屋におすそ分けに行く。「おいしいね」「味見させてくれてありがとう」と言ってもらえてうれしそうであった。(担任からの聞き取りより)

[考察]

この2人の姿から、思いを分かってもらえなかったり、相手に拒否されたり(拒否されたと感じたり)する機会が多くなってしまいがちな発達に凸凹のある子にとって、絶対に肯定してもらえると安心して出かけ、そのさきで、「ありがとう」と肯定してもらえる経験が自己肯定感を育む支えになっていると考えられる。

## ②「年長の時間」

10月4週から、1時から3時まで4つのクラスの5歳児が合同で、散歩、集団遊び、クッキングなどをして交流している。午睡時間を利用した「年長の時間」は、年長ならではの活動があり楽しい時間ではあるが、Jにとっては慣れない人間関係でつらい時間でもあった。保育者も毎回交代し、鬼ごっこのルールもクラスによって違っていて、人、物、ルール、遊びの種類など、自分のクラスとは異なる変化に対応が難しく、不安や緊張、戸惑いが多く、クラスに戻るとしばらくイライラが続く姿が見られた。そこで、Jにとって「年長の時間」が居心地の良い場になるようにと、しばらく、担当を担任Bに固定し、Jの様子を見守ることにした。担任Bは、人間関係や遊び方の変化による不安、緊張をやわらげ、トラブルが起きたときの対応の方法、自分の気持ちの表し方や相手の気持ちの理解の仲介等を援助するようにした。

### (2) 周りの子どもたちもJとの関わり方を配慮する

〈エピソード22〉 10月14日 午前中の遊び

砂場で3歳児Sがコップを使ってどんぐりケーキを作っているところにJが突然来て、砂をすべて出して去って行ってしまふ。Sが泣いていると、4歳児Pがそばに来て、「Sちゃん、何色のコップで、何色のどんぐりだった?」と聞くと、Sもすぐに泣き止んで再び一緒に作り始める。こうした場面で、周りの子もJ

がしたことに、怖がったり怯えたりしないで、「嫌だったねー」と声を掛けあったり、背中をさすってあげるなど、Jの行動にあまりこだわらない変化が見られるようになった。

〈エピソード23〉 11月18日 午前中の遊び

Jは、園庭に行きたい1歳女児Nを部屋のドアの前でおせんぼうする。「ぎゅーってしたらいいよ」と言われ、Nは素直に受け止め、Jにぎゅーっと抱き締められる。Jも、力が抜けた感じで心地よさそうだった。Nはうれしくて「もう1回」とリクエストする。またぎゅーっとしてもらうと、J「開けまーす」と気分よさそうにドアを開けてNを通した。

[考察]

この頃、1歳児Nは、Jの顔が近くにきて嫌なときだけ泣いてアピールしていたが、Jが外にいて姿が見えないと、「Jは(どこ)?」と大人に聞いたりして気にする姿が見られた。Jを見つけると「J!」と、にこにこしながら指さしたりして、NはJが自分のことを好きなことをわかっているようだった。Jも自分が慕われていることを感じており、力の加減もできるようになってきている。

〈エピソード24〉 12月12日 朝のおうちごっこ

朝からクラス内の3つの部屋を使ってそれぞれの遊びが展開されている。Jは、畳の部屋に作られた5人入るといっばいになってしまうままごとコーナーの奥にいた。ままごとコーナーには、前日皆で作った段ボールの扉がある。扉付近にテーブルがあり、そこには4歳児のUとKの女児2人が1歳児のNとPのお母さん役とお姉さん役になっている。Jは一番奥のキッチンで、何やら真剣な表情で黙々とフライパンで料理を作っている(今までに見たことのないような姿で)。その日はJの6歳の誕生日だった。そのうち、隣の部屋の絵本コーナーが保育園になり、UとKがNの手をつなぎ「さあ行きますよ」と保育園ごっこを始める。それを見ていたもう一人の1歳児Pがお弁当を持っていきたくてJに手を差し出す。するとJは何も言わず、わかったよというように料理を作り続けていた。この日、この4人は散歩に行かないで、ずっとレストランごっこを続けた。

[考察]

Jは、ままごとで友達とそれほど会話を交わすことはないが、心を許せる数人の友達と一緒にごっこ遊び

に参加している。Jはこの頃、ままごとやお医者さんごっこなどのつもり遊びができるようになり、トラブルもなく楽しんでいる。保育者も子ども同士遊ぶ姿をゆとりをもって見守ることができるようになっていく。担任によれば、Jは、4歳女児Kのことが気になっており、嫌がるようなちょっかいを掛けることが多かった。しかしプール遊びの頃から、「俺、Kのこと好きなんだ」と言うようになり、2人が手をつなぐことが増えた。KもJへの対応の仕方が分かってきたようだ。(それまで保育者が、つい〇〇したくなってしまふJの気持ちを丁寧に伝えてきた。) Jの心を許せる友達が、Kや5歳のHと広がりを見せている。(同年齢のTは、Jにとってはずっと憧れの存在である。)

この時期、バナナ鬼ではJがリードして遊んでいる。妹が生まれるJは、小さい子への接し方がやわらかくなってきて、泣いているとそばへ行って「どうしたの?」と言う声が出るようになってきた。とくに1歳のNが大好きで本を読んであげたい、ほっぺたも触りたい、手もつないであげたいという気持ちが見られる。

#### 〈エピソード25〉 12月15日 朝のごっこ遊び

早い登園の子どもたちがホテルごっこで盛り上がっていた頃、Jが(家庭の都合で)9時半頃登園してきて、「ここはおれとTとKがやってたんだ」と他の友達を追い出したり、玩具を投げたりホテル中をぐちゃぐちゃにしてしまうことがあった。前日のJのそのような姿を覚えていたKが、「みんな、もうすぐJが来るから、1回片づけて(ホテルの中を)きれいにしよう」と皆に声をかける。他の子どもたちも「そうだねー」と、言い、1,2歳児も一緒に片づけをして、きれいになったところで遊びながらJを迎えた。

[考察]

Kを中心とした周りの子どもたちはJと楽しくごっこ遊びをした経験もあり、遊びが盛り上がっている時に参加しづらい気持ちもわかって受け止め、楽しく遊ぶためにはどうしたらよいか配慮している。

#### 〈エピソード26〉 1月30日 朝の遊び・あつまり

Jは、この日も遅い登園で、皆の遊びが繰り広げられている最中であつたが、カバンを降ろすとさっそく、窓硝子に貼られた鬼を発見する。そして、「ほか

のクラスは何色鬼だろう? 確かめてくる!」と飛び出していく。帰ってくると「△(クラス)は、泣き虫鬼だった! □(自分のクラス)は怒り鬼だ!」とC保育者に報告していた。

絵本の時間でも、途中3歳児Rがトイレへ行くことで、読み聞かせが中断される場面があつたが、リーダー保育士が、「待っていてほしいって」と他児に言うと、どの子も怒ることもなく、戻って来るのを待っている。Jも怒らないで待つことができた。全部で5冊の絵本を、1歳から5歳の子どもたち全員揃って、集中して聞いた。

[考察]

秋頃には、Jが登園が遅く皆の遊びに出遅れると、イライラしてトラブルが起こりそうな緊張感が走るが多かつたが、そのようなことはなく、うまくその場の雰囲気に入って行けるようになっていく。

これまで、絵本の時間については、全員は集中できないことが通常であつたのに、1歳から5歳の子どもたち全員が、途中で中断するようなことが起こつても、これほどの集中と持続力で、しかも内容を楽しみながら見続ける姿に、Jの変化だけでなく異年齢クラスの全体の成長を感じた。

また、Jは、自分で遊びたいものが見つけられるようになってきた。同時に他児の動きを見て、自分の動きをコントロールできるような変化成長がみられる。その根底には、「入れて」と言えば「いいよ」と言ってくれる子がいる、つまり、受け入れられる安心感があるのだと考えられる。

さらにJは、いろいろな選択肢の中で、自分でどうしたいかを決めることができるようになってきたといえる。それは、問題が生じたときに保育者が中に入りながら、例えば、イライラした時に、「こんな方法もあるよ」と、解決方法を2つ3つ提示しながら「どれにする?」と、J自身が、自分で心の整理をし、決定できるようにしてきたことによる。また、「こうすると相手はこんな風に思うよね」と、相手の気持ちを考えさせたり、なぜうまくいかなかったのかを、その都度、ひとつずつ丁寧に振り返ってきたことによる。

「年長の時間」と異年齢の部屋と、両場面の姿を理解してくれるおとなの存在と、周りの子どもたちのJへの理解の進展の両者が相互に作用しあつて、このようなJの成長につながつたのだと考えられる。Jが落ち着くことで、子ども同士が関わり合つて遊ぶ姿が増え、保育者が入らなくても、安心して見ていられるよ

うになっていった。そして、年明けはインフルエンザ流行でクラスの人数が少なく、今まで関わらなかった友達と遊ぶようになり、友達関係が広がっていった。

3月には、自分たちが鬼ごっこを始めようとした時、入ってこようとした3歳児にJは、「だってRはいつも入れてあげているもん、今日は早いチーム（5歳児）だけでやりたい。」と理由を言って断った。しかし、保育者がRはJと遊べるものと少ししかないので、一緒に遊びたいんじゃない？」と代弁してやると、まんざらでもない様子で入れてあげたそうだ。このような自己コントロールもできるようになっていった。

#### 4. 総合考察

自分がうまくできないと思うと怒って暴力的な行動をとってしまったり、目に入った物や感覚的な刺激に反応してしまったり、自分の思いを言葉で表現することが苦手だったJであるが、年上の友達を真似して遊び、保育者を支えに周りに自分の気持ちを受け止められることにより、友達の気持ちを思いやったり、行動をコントロールしたりできるようになっていった。1期では、自分を受け入れてくれる保育者とIとの関係、2期は、Iを含む数人の4、5歳児との関係ができ、3期では集団に受け入れられていることを感じ、友達を求め、ルールが簡単な集団遊びに参加できるようになった。4期では、Jはクラスの中での自分の位置を意識するようになり、クラスみんなで行うクッキングなどをしたいと要求し楽しむようになった。周りの友達に抵抗されたり要求されて自分を抑制することも増えた。5期では、Jの周りの子どもたちが、Jの気持ちを配慮して動くようになり、ままごとやお医者さんごっこなどを小さい子も含めて一緒に楽しめるようになった。集団遊びではリーダー的に振る舞い、教えてあげるようにもなり、や自尊感情も育っていった。

1歳児とはどのように関わってよいかわからず暴力的になることもあったものの、1期から1歳児を抱っこして甘えさせたり、3期には1歳児から「好き」と言われ受け入れられ、安心感をもち、小さい子が困っていると手助けするようになった。小さい子からも、憧れたり、頼られ認められる関係になり、年長児としての自覚もでてきた。Jは、年長児に抱っこされたり甘える姿はほとんど見られなかったが、Iと同じことを真似してやろうとすることで甘えていたのかもしれ

ない。言葉で表現することが苦手だったので、教えたり、励まし合ったりする姿も多くは見られなかったが1歳年下のHは、Jに憧れてついてきたり、同じことをして遊ぼうとするようになり、JもそのようなHを受け入れるようになった。その過程では以下の点が重要であったと考えられる。

- ① Jにとって魅力的な遊びをしている年上の友達の真似をしたり、遊びに目的を持てるように配慮した。
- ② 保育者と一対一で関わる場もつくりながら、わかりにくいJの気持ちを推察し聴き取り受け止めることで、周りの子にも受け止められるようになった。またJの気持ちを代弁したり、「～って言ったら？」と言いつ方を伝えることで、自分でも言えるようになっていった。
- ③ 活動や鬼ごっこのルールやどの公園に行くかの話し合いにホワイトボードを使用し、視覚的にもわかりやすくすることで、参加への意欲を高めた。クッキングも目で見てわかりやすく達成感のもてる活動だったといえる。
- ④ 食事の際は、グループを小さくすることで、友達が見えやすくなり、小さい子を手助けしたり憧れられたりすることにつながった。
- ⑤ その子が今やっている活動を肯定的に意味づけたり、やりたいと言う活動を実現させるように援助した。
- ⑥ 朝のあつまりを、1、2歳でも興味が湧くようなやり方で行うことによって、クラス全員が集まって楽しく行うことができ、小さい子から慕われ頼りにされるようになっていった。

以上のことは、(2)の論文でも見出された。②～⑤は、同年齢集団でも行われることであるが、そのようにわかりやすくすることは、年齢差のある異年齢集団ではより重視される必要があるだろう。

Jの変化には集団の力が大きかった。少々乱暴でも受け入れてくれたり、憧れる子がいる異年齢の集団に支えられて、Jも次第に自分の行動をコントロールしていけるようになった。

⑥は、1歳から5歳の異年齢集団における特徴であろうが、朝の会や話し合いを全体で行うか年齢に分けて行うか、どのような日課の作り方がよいのかは、今後の検討課題である。

また、4歳児のときに憧れてモデルとなるような5歳児がいなかったことから、隣のクラスとの交流もどのように進めていくのか検討課題である。

注

\*<sup>1</sup> 愛知県立大学教育福祉学部教授 \*<sup>2</sup> 名古屋短期大学非常勤講師 \*<sup>3</sup> 愛知県立大学非常勤講師

- 1) 山本理絵「異年齢保育で大切にしたいこと」『ちいさいなかま』No. 564 2011年9月号 pp. 32-37
- 2) 山本理絵・藤井貴子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(1)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第63号 2014年 pp. 99-110
- 3) 山本理絵・松川礼子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(2)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第64号 2015年 pp. 111-120

- 4) 山本理絵「異年齢保育の魅力」林若子・山本理絵編著『異年齢保育の実践と計画』ひとなる書房 2011年 pp. 36-40

付記：本研究は科学研究費（2012～2016年度 基盤研究(c) 課題番号2453104 山本理絵研究代表）の助成による。日本保育学会第69回大会（2016年5月7日）でポスター発表した内容をもとに論文にした。観察・聞き取り調査を山本・松川で担当し、記録の分析に近藤が関わった。研究に協力していただいた皆様に感謝します。